中部学院大学・中部学院大学短期大学部　教育実践研究第３巻第２号（2018）51－59

児童の学習・行動の評価としての通知表所見に関する教員の意識分析

山　崎　宣　次[1)]

Analysis of the Consciousness of Teachers Concerning Elementary School Report Card Comments as Evaluation of Children's Learning and Behavior

Senji　YAMAZAKI

通知表所見の記述は、現場の教員にとって仮に経験があっても非常に負担感の高い校務である。そこで、筆者らは通知表所見記述支援を目指した研究を進めてきた。また、現場の教員が通知表の所見に関してどのように考えているかを明らかにするため、一昨年、小学校教員対象に全国的な調査を実施した。その結果、通知表の所見という短い文章に児童の様子をいかに適切に表現し、保護者に伝えることが難しく、負担に感じているかが改めて分かった。

キーワード：小学校、通知表所見、意識調査、評価、教師教育

１．はじめに

通知表の所見記述は小学校における校務の中で最も負担感が高い（山崎 2013a）。経験を積み、担任として何度も所見を記述していると、ある程度の所見は書けるようになる。しかし、少しでも児童の成長を促すために、どのような表現で記述したらよいかを悩んでいる教員は、経験豊富な教員ほど多い（山崎 2013b）。

しかし､所見記述の負担感が高いにもかかわらず、その支援に関する先行研究はほとんど見当たらない。これは、通知表の所見がとてもナイーブな個人情報であるため、研究対象になりにくいことも原因であると考えられる。山本ら（2015）は、所見の記述内容について市販のテキストマイニングソフトを利用し､単語の係り受けに関する傾向を分析したが、記述支援には至ってはおらず、着目すべき単語も出現頻度の上位の単語を選択しているだけである。

そこで、このような現場教員の負担感を少しでも軽減できるように筆者らは、教員が所見記述をするための支援を目指し所見データの分析を進めてきた（山崎 2013c～2015c）。

しかし、小学校教員が通知表所見記述に対してどのような点で苦労しているのかなど、所見に関する意識調査は一部の地域でしか調査してこなかった（山崎 2013a～2013b）。そこで一昨年、全国の小学校教職員500名を対象に WEB アンケート調査を実施した。今回は、その調査結果についてのクロス処理など統計的な結果も含めて報告する。

２．目　　的

本研究では、全国の小学校教職員が通知表所見の記述についてどのように考え、何に困っており、何を参考にして記述しているかなどの実態調査の分析をすることで、今後の通知表記述支援の参考にする。

３．調査方法

今回の WEB アンケートは、業者に委託して実施した。その概要は以下のようである。

１）教育学部子ども教育学科

・実施時期：2015年10月
・対象人数：500名（全ての都道府県）
　なお、500名のうち、所見を記述した経験がない者等41名を除き、459名について分析した。
・対象者：小学校教職員
（講師・管理職・養護教諭等も含む）

質問項目は、個人情報として年代・性別・地域・役職・担任・所見記述歴の他、所見に関しては、下記の項目について調査した。

① 所見記述の負担感
② 所見記述で大変なこと
③ 他の教員の所見を参考にするか
④ 過去の自分の所見を参考にするか
⑤ 所見での自他の特徴単語提示システムを使用してみたいか
⑥ 適切な所見の記述に性差や経験差が関係するか
⑦ 通知表所見に関する自分の思い（自由記述）

また、通知表の所見のシステムとして、下記のことも調査した。

① 所見欄の有無
② 所見は手書きか
③ 所見のチェックはあるか
④ 他の教員の所見を閲覧できるか
⑤ 校務支援システムは導入されているか
⑥ 校務支援システムに所見も組み込まれているか等である。

4．結果と考察

4.1. 回答者全体の結果

(1) 通知表に所見はあるか

通知表に所見欄があるかについては、図１ように95.4％の者が、所見欄があると回答した。全国ほとんどの小学校の通知表に所見欄があることが分かる。

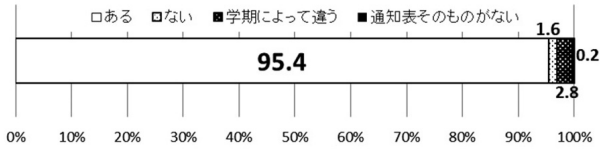

図１　通知表に所見欄があるか

(2) 所見は手書きかパソコン等で記述するか

通知表の所見は68.7％が全員パソコンで記述しており、全員手書きと回答した者は8.1％しかいなかった。自由だがほとんどパソコンで記述する者を含めると83％の者が所見はパソコンを使用していると回答した。

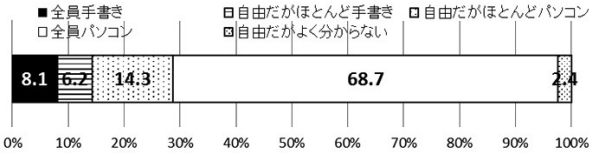

図２　所見は手書きかパソコンで記述するか

(3) 所見記述に負担感はあるか

図３のように、全く負担感がないとの回答は4.6％であり、63.2％の者は負担感を強く感じていた。

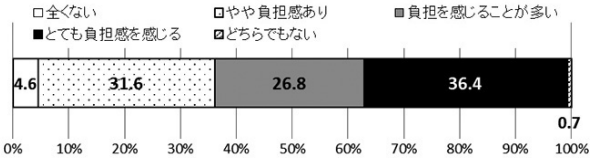

図３　通知表所見記述に負担感はあるか

筆者が2012年に一部地域の小学校教職員176人対象で調査した結果（山崎 2013a）では、
・ほとんど負担感ない：　3.4％
・あまり負担感はない：17.2％
・やや負担感がある　：38.6％
・非常に負担感がある：40.7％
となり、約８割の者が負担感を感じていたが、今回の調査ではそれより少ないものの６割以上が負担感を感じていた。

(4) 所見を書くときにどんなことが大変か（複数回答可）

図４のように、半数以上の教員が「その児童の前学期（前学年）と同じような表現にならないようにする（53.8％）」「その児童について、表現する適切な言葉（単語）が思いつかない（50.3％）」ことに大変であると回答していた。次いで「日本語の文章

表記に間違いがないか（41.6%）」「その児童について何を書いたらよいか思い当たらず記述が止まってしまう（40.6%）」ことが大変であると回答した。

つまり、何度も所見を記述しているとどうしても同じような表現（単語）になり、別の適切な表現が思い浮かばないために苦労していると推測される。

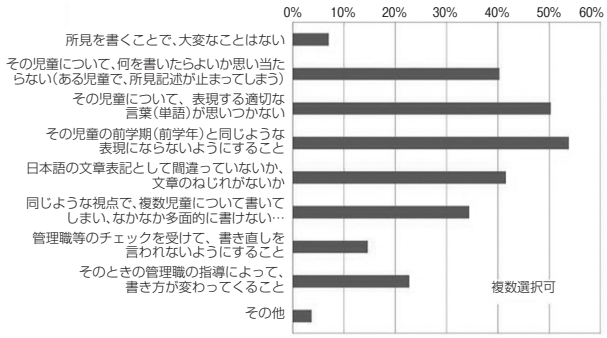

図４　所見を書くときにどんなことが大変か

(5) 過去に自他の教員が記述した所見を閲覧できるか、また、それらを参考にしているか

図５のように、62.1%の者が他の教員が記述した通知表所見を閲覧することができると回答している。にもかかわらず、実際に他の先生の所見を参考にして所見を書くと回答した者は、図６のように４割程度しかいなかった。つまり、許可なく他の教員の所見が閲覧できると回答した者が18.1%と少なく、許可を得てまで他の先生の所見を参考にすることが少ないのではないかと推測される。

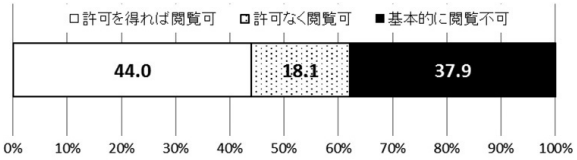

図５　他の教員の所見は閲覧できるか

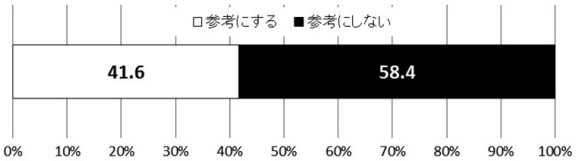

図６　他の先生の所見を参考にしているか

また、図７のように自分自身が過去に書いた所見を持ち出して所見記述の参考にしているのは44.2%で、４割程度の者は自分の過去の所見を持ち出してまで参考にしていないことが分かった。

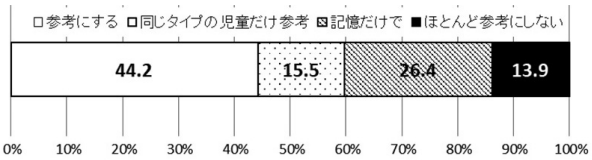

図７　自分が過去に書いた所見を参考にするか

(6) 管理職以外の教員で所見を事前に点検するか、また、管理職も含めて所見を事前にチェックするシステムはあるか

図８のように、半数程度の教員が事前に管理職以外の教員同士で点検することがないと回答し、ベテラン教員に自主的に見てもらう教員は１割程度しかいなかった。

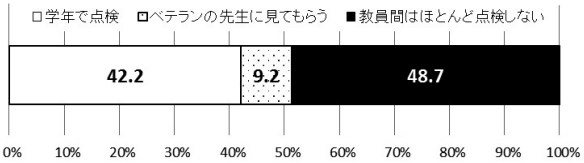

図８　所見は事前に点検しているか

同学年の教員同士等の事前のチェックはなくても、図９のように管理職などの事前チェックのシステムがあると回答した者は約９割おり、担任教員が記述した所見がそのままチェックなしで児童や保護者に配布されることは少ない。

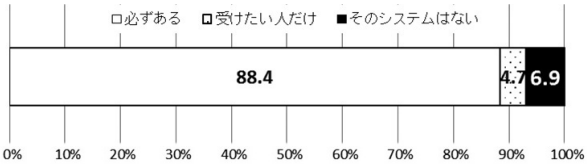

図９　所見を事前にチェックするシステムはあるか

つまり、半数の程の教員は管理職等による事前チェックのみで所見を完成させていることが分かる。管理職も全ての児童の実態を把握できているとは言い難く、どうしても文章表記上のチェックが中心になると予想される。また、一般的に管理職より学年教員等の方が児童との接する機会が多いと考えれば、管理職以外に学年教員やベテラン教員の

チェックを受けることも、より適切な所見を記述するために大切と考えられる。しかし、所見を記述する時期は決まっており、担任教員が所見を記述する時期には他の学年教員もベテラン教員も所見を記述しなければならない。そのため、お互いにチェックできる時間的な余裕が不足することなども管理職以外の教員同士の事前チェックが少ない原因と予想される。

(7) 校務支援システムは導入されているか、また、校務支援システムに通知表所見記述は組み込まれているか

近年、校務の情報化に伴い、校務支援システムを導入する学校が増えてきた。図10のように、64％の者が勤務校に校務支援システムが導入されていると回答している。

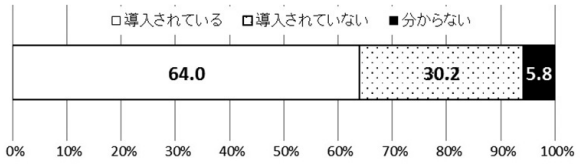

図10　校務支援システムは導入されているか

また、校務支援システムが導入されていると回答した64％の者（320人）に、通知表の所見が組み込まれているかを聞いたところ、図11のように、約８割の者が所見の記述も組み込まれていると回答した。

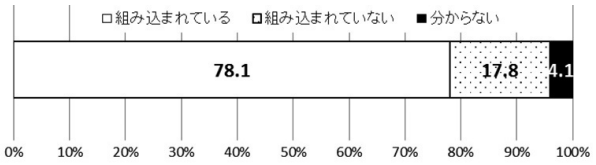

図11　校務支援システムに通知表の所見は組み込まれているか

(8) 所見の特徴単語を教えてくれるシステムは利用したいか

図11のように校務支援システムに通知表の所見が組み込まれているとはいえ、現在、市販されている校務支援システムでは、単に所見の文章を教員が入力するとそのまま通知表の枠にはめて、他の成績とともに通知表を印刷するシステムである。

筆者らが研究開発を進めているのは、何度も所見を記述していると同じような表現（単語）を使ってしまったり、その児童に適切な表現（単語）が思いつかなかったりする教員の悩みを支援するシステムである。具体的には、自分が所見に多用する表現（単語）や、自分はあまり使用しないが、他の教員は多用している表現（単語）を客観的に提示するシステムを研究開発している。

そこで、筆者らが開発しているシステムを利用したいかを聞いたところ、図12のように使用したいと回答した教員は56.6％であった。

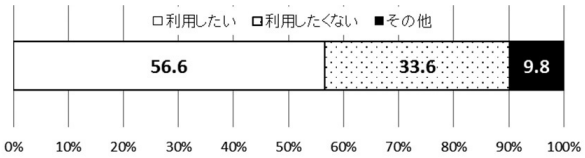

図12　特徴単語提示システムは利用したいか

また、「その他」と回答した者の中には、筆者らが研究開発を進めているシステム自体が現時点で市販流通されていないため、具体的なイメージがわかないという者がいた。

しかし、半数以上の者は筆者らが研究開発を進めているシステムを使用したいと回答しており、負担感が高い通知表の所見の記述支援システムの開発意義や有用性は高いと考えられる。

(9) 適切な所見の記述に性差や経験差が関係するか

児童に対して適切な所見を書くかどうかは初任者など経験年数が少ない先生は別として性別や経験年数に関係すると思うかの設問には、図13のように経験年数に関係すると回答した者は約７割いたが、性別に関係する回答した者は約３割であった。

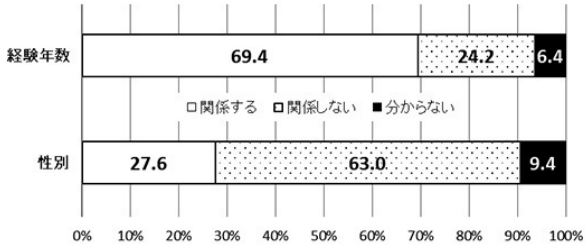

図13　適切な所見記述に性差や経験差が関係するか

つまり、いわゆる上手な所見を書くことができるのは男女の違いではなく、経験年数の違いであると考えていることが分かる。

しかし、24.2%の者は経験年数に関係ないと回答しており、必ずしも教職経験が多くても児童に適切な所見が記述できるとは限らず、その教員次第であると考えている者もいる。実際、筆者が複数の小学校校長にインタビューした際にも、経験年数が多くても適切な所見が記述できない教員もおり、逆に初任者でも適切な所見を記述する教員はおり、経験年数と適切な所見の記述は関係ないと答える校長も何人かいた。

4.2　クロス処理による結果

次に、性差や経験年数等の違いによる回答の相違を検討した。クロス処理において、有意水準0.05より小さく、有意な差が認められたもののみを以下に述べる。

(1) 性差による回答の相違

有効回答数459人中、女性教職員は157人（34.2%）、男性教職員は302人（65.8%）であった。全国の小学校における教職員の男女比は女性が62.2%、男性は37.8%（文部科学省 2017）であるため、本調査における男女比は、文部科学省の学校基本調査のほぼ逆であった。これは WEB 調査であることと、500人に達した段階で調査は終了することなどが原因と考えられる。そのため、やや男性教職員の意識がより多く反映していると考えられる。

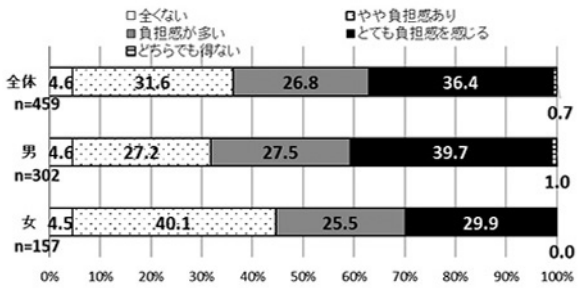

図14　性差による所見記述の負担感

本調査における性差による回答の相違は、図14のように男性の方が女性より所見記述に負担を感じる者が多く、「とても負担感を感じる」と「負担感が多い」を合わせると男性は約67%以上であるのに対し、女性は約55%であった。

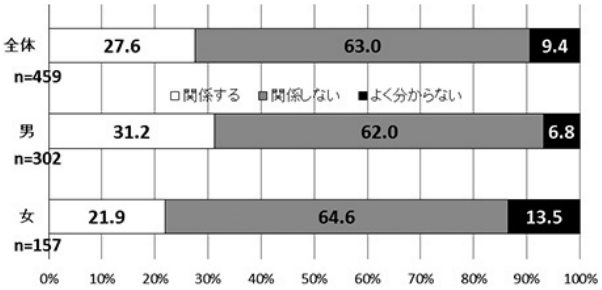

図15　適切な所見記述に教員の性差はあるか

また、「児童に対して適切な所見を書くかどうかは性別に関係すると思うか」の問いに対しては、図15のように男性の方が女性より性差があると回答した者が多かった。今回のアンケートでは男女の違いのみを聞いており、性差があると回答した者が男女でどちらがより適切な所見を記述できるかと考えているかについては不明である。

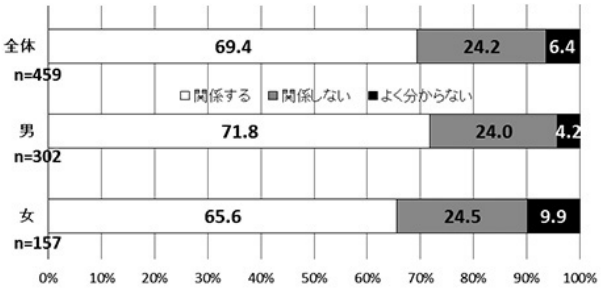

図16　適切な所見記述に経験差はあるか

さらに、適切な所見を記述するのに経験差があると回答した者も男性の方が多く、約72%いた（図16）。

以上のことより、男性教職員の方が女性教職員より、所見記述に負担感を感じ、適切な所見を記述できるかについては、性差は関係ないと回答する者が約60%と多いものの、性差や経験差が反映していると考えている者が多いことが分かった。

(2) 役職の違いによる回答の相違

役職別に見ると、図17のように管理職の63.4%は、性差はないと回答しているものの、性差があると回答した管理職は、管理職でない者と比べやや多く、32%以上いた。

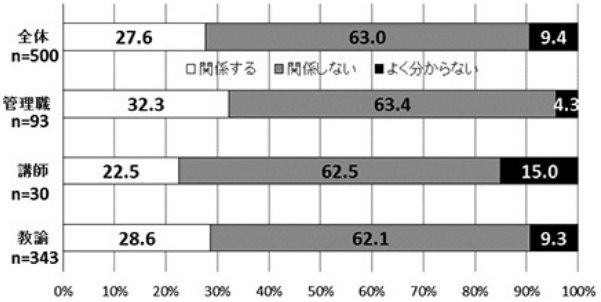

図17　適切な所見記述に教員の性差はあるか

全体としては適切な所見を記述するのに性差は関係ないと回答する者が約60％と多いものの、男性や管理職の方が､性差を意識していることが分かった。

(3) 過去に記述した自他の所見を参考にするかどうかによる回答の相違

他の教員の過去に記述した所見を参考にすると回答した教員は図18のように、他の教員の所見を参考にしないと回答した教員に比べ、自分の過去に記述した所見も参考にする割合が多かった。つまり、過去の所見を参考にしたい教員は自他ともに過去に記述した所見を参考にしやすいと言える。

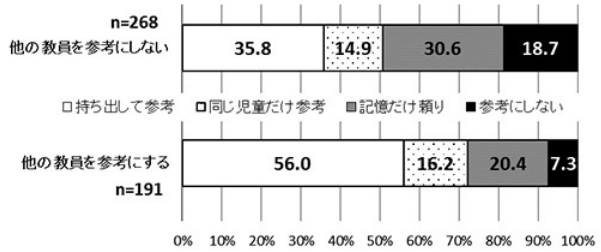

図18　他の教員と自分の所見を参考にするか

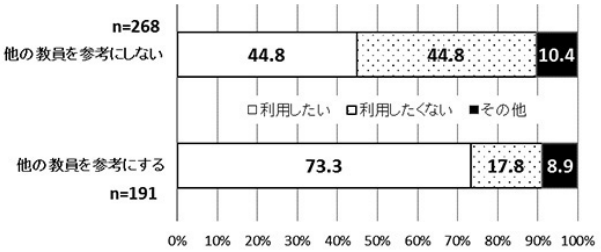

図19　他の教員の所見を参考にするかと記述支援システムを利用したいかの関係

また、他の教員が記述した過去の所見を参考にしたい教員ほど、図19のように筆者らが研究開発中の所見記述支援システムを利用したいと回答している。つまり、所見を記述するために何かを参考にしたい教員は、自分の過去の所見も他の教員が記述した所見も記述支援システムも何でも参考にできるものは参考にしたい傾向にあると予想できる。

さらに、過去の自分の所見を参考にするかどうかと適切な所見を書けるかが経験年数と関係あるについては、図20のように、過去の自分の所見を参考にする者の方が経験年数と適切な所見を記述することは関係すると回答している。

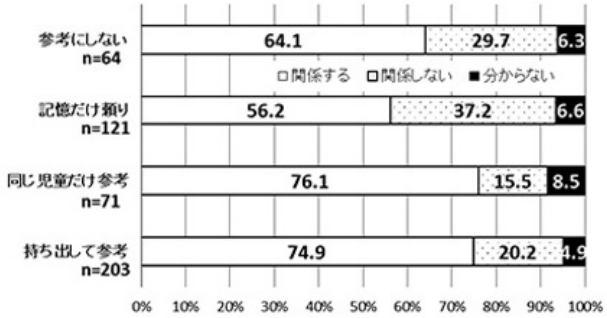

図20　過去の自分の所見を参考にするかと適切な所見は経験年数に関係すると考えるか

(4) 他の教員の所見を閲覧できるかどうかの環境による回答の相違

図21のように、他の教員の所見が閲覧不可の環境にいる者より、閲覧可能な環境にいる者の方が、他の教員の所見を参考にしやすい。

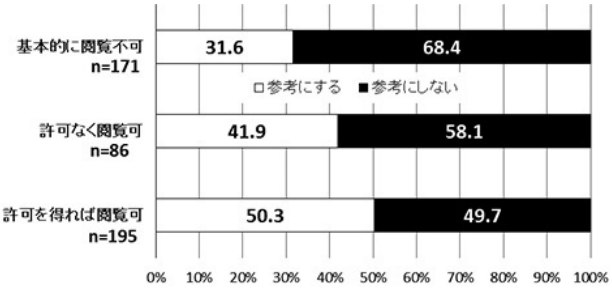

図21　閲覧環境と他の教員の所見の参考

これは当然の結果であるが、基本的に閲覧不可の環境であっても他の教員の所見を参考にしようとするものが３割以上おり、例えば、他の教員に直接に頼むなどしてでも他の教員の所見を参考にしようとしている可能性がある。また、許可なく閲覧可能な

環境より許可が必要な場合の方が、他の教員の所見を参考にする割合が高かった。許可を得てまで他の教員の所見を参考にしたいと考えていると予想される。

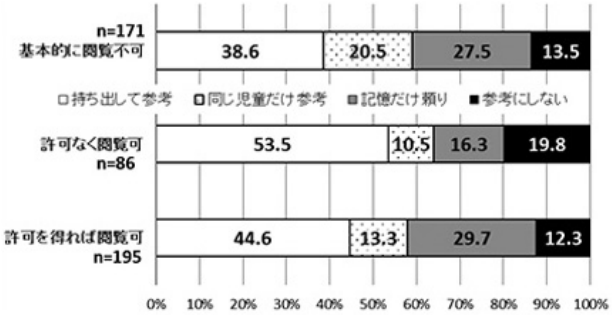

図22　閲覧環境と自分の所見の参考

図22のように、許可なく閲覧可能な環境にいる者の方が、自分の過去の所見を参考にする割合が高い。しかし、逆に許可なく閲覧可能な環境にいる者の方が、自分の過去の所見は参考にしない割合も多かった。

(5) 経験年数の違いによる回答の相違

経験年数と適切な所見を記述できることに性差があるかについては、図23のように、経験年数の多い者ほど、適切な所見を記述するのに性差があると回答している。この傾向は経験年数が多くなればなるほど強まっている。

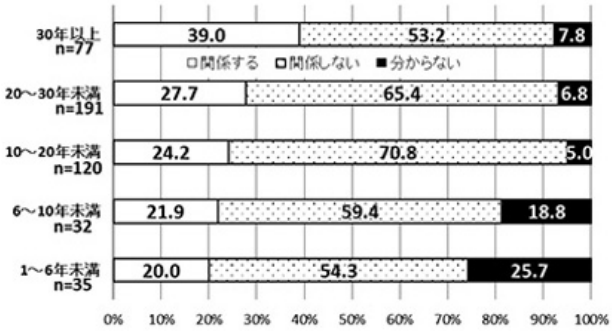

図23　経験年数と適切な所見記述の性差について

さらに、経験年数と他の先生の所見を参考にするかどうかについては、図24のように、ほぼ経験年数が多くなるにつれて他の教員の所見は参考にしない傾向にあった。これは経験年数が多いほど自分の所見記述能力に自信やプライドがつくためか、他の教員の所見は参考にしなくても自分で所見が記述できると考えていると予想される。

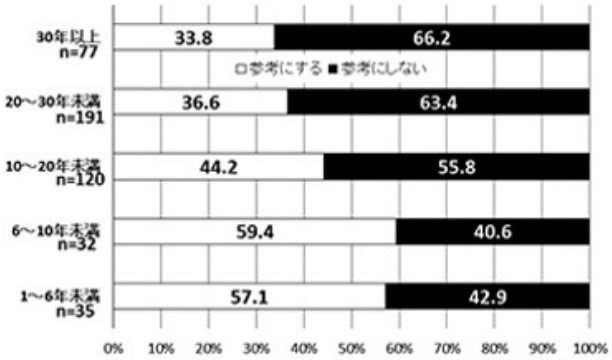

図24　経験年数と他の教員の所見の参考

(6) 事前にチェックがあるかどうかと所見の大変さについての回答の相違

事前に管理職以外の教員による点検がないと回答した者の方が、「その児童について何を書けば良いか思い当たらない」ことで所見の負担感を感じている。つまり、事前に管理職以外の教員にチェックしてもらうことで、その児童について何を書いたら良いのかについて何らかのヒントを得ている可能性が考えられる。

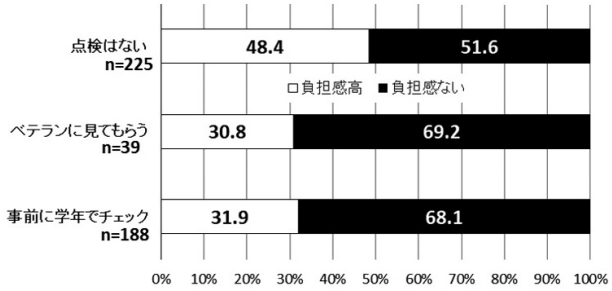

図25　管理職以外の事前点検と所見の負担感

4.3　自由記述の分析結果

アンケートの最後に、通知表の所見について思っていることを自由に書いてもらった。この自由記述について KH_Coder（Ver.3a11）を用いてテキストマイニング処理をし、管理職と非管理職の相違について検討した。

全体的には、図26のように、「保護者」「伝える」「伝わる」「難しい」「良い」「表現」「負担」「大変」「必要」などの単語が多く抽出され、いかに保護者

に児童の良い面を伝えることが難しく大変であり、負担に感じているかがうかがわれる。

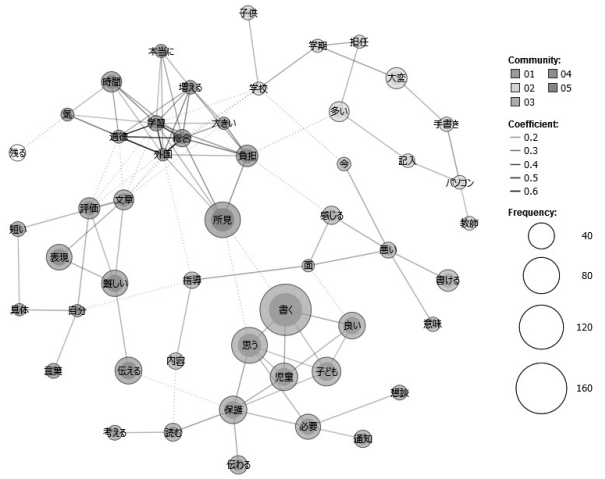

図26　全体の共起ネットワーク

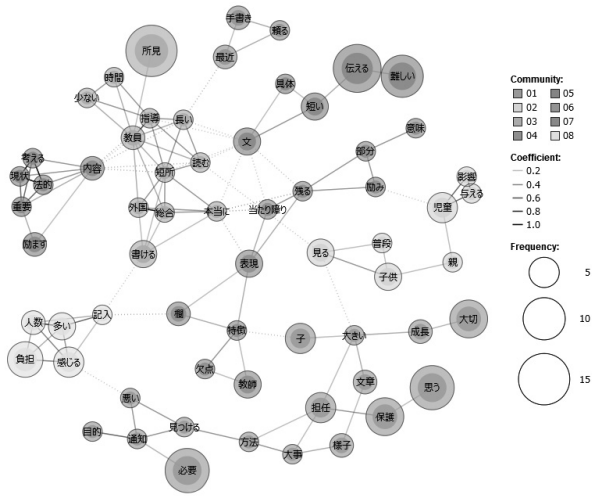

図27　管理職の共起ネットワーク

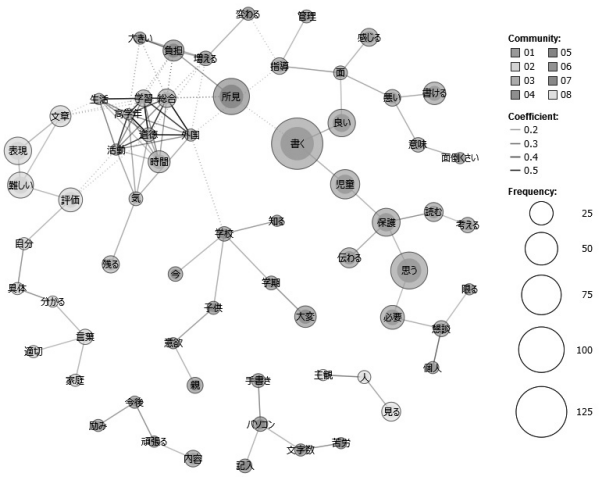

図28　非管理職の共起ネットワーク

教職経験年数による比較では、20年以上経験がある教員は、「必要」「難しい」「大変」「伝わる」「表現」「大切」「短い」「評価」などの単語が10年未満の教員より多く抽出され、経験があるだけに短い所見の文章にいかに児童の様子を表現することの難しさを感じていることがうかがわれる。

また、管理職教員と非管理職教員では、非管理職教員は「懇談」といった単語が管理職教員より多く抽出され、懇談面談などで保護者と直接話をする方が、所見より意義があると感じている者が多かった。

５．まとめと今後の課題

本研究は、全国500人の小学校教職員を対象に、通知表の所見についての意識を調査した。その結果、６割以上の者が負担感を多く感じていた。特に、男性教員の方が女性教員より負担を感じていた。その負担に思う内容としては、対象の児童に前学期記述した内容と同じ表現にならないようにすることや、適切な表現が思い浮かばない、何を書いたら良いか思い当たらないなど適切な表現方法に思い悩んでいることが分かった。また、管理職以外の教員に事前チェックを受けるシステムがないと回答した者ほど、何を書いたら良いか思い当たらなくて困っている者が多かった。

６割以上は他の教員の所見を閲覧できる環境にあるが、実際に他の教員の所見を参考にする者は４割程度しかおらず、過去に自分が書いた所見も６割程度しか持ち出して参考にしていなかった。さらに、９割程は管理職等が所見を事前チェックするシステムになっているが、学年の教員間など管理職以外の教員で事前に所見を点検すると回答した者は４割程度しかいなかった。また、経験年数が多い者ほど、他の教員の所見は参考にしていないことも分かった。

適切な所見を書くことができるかどうかに性差はあると思う者は３割程度であったが、経験年数には７割の者が関係すると回答していた。自分の過去に記述した所見を参考にする者ほど、適切な所見を記述することは経験差があると回答していた。さらに、経験年数が多い者ほど、適切な所見を記述するのに性差があると回答する者が増えていた。

校務支援システムは、６割以上で導入されていると回答し、そのうち、８割は通知表の所見も組み込

まれていた。筆者らが研究開発中の所見記述支援システムについては6割弱のものが利用したいと回答し、他の教員の所見を参考にしている者ほど、このシステムを利用したいと回答していた。

これらのことより、通知表の所見記述には該当児童への適切な表現（言葉）が見つからないなどで負担感が高いが、管理職以外の事前チェックは十分ではなく、他の教員や過去の自分が書いた所見などを持ち出して参考にしたくてもなかなか参考にできない現状が推測される。そのため、筆者らが研究開発中の所見記述支援システムの有用性は高いと考えられる。

今後は、これらの分析結果を基に、開発中の所見記述支援システムによって自他の特徴単語を提示することで実際の所見にどのような記述の変化が出てくるかを調査していきたい。

謝　辞

本研究はJSPS科研費26350350の助成を受けたものです。

引用文献

文部科学省（2017）平成29年度学校基本調査（速報値）（2017.12.20最終確認）
http: //www. mext. go. jp/component/b_menu/other/__icsFiles/afieldfile/2017/08/03/1388639_1.pdf

山本朋弘，堀田龍也，宮田明子，鈴木広則（2015）校務支援システムでの学習評価に関する記述の分析，日本教育工学会研究報告集，JSET15(1)，pp.575-580

山崎宣次（2013a）小学校における校務の負担感，大阪成蹊短期大学研究紀要，第50号，pp.39-52

山崎宣次，森広浩一郎，掛川淳一，中間玲子，小川修史，加藤直樹，日比光治，興戸律子（2013b）小学校における通知表等所見の現状～教師のキャリア形成として～，日本教育情報学会第29回年会,大会論文集．pp.296-297

山崎宣次，森広浩一郎，掛川淳一，小川修史，加藤直樹，日比光治，興戸律子（2013c）小学校通知表所見のテキストマイニング，日本教育工学会第29回全国大会，大会論文集．pp.339-340

山崎宣次，掛川淳一，小川修史，加藤直樹，日比光治，興戸律子，森広浩一郎（2014a）特徴単語による小学校通知表所見の教員間比較，教育システム情報学会 研究報告，vol.28，no.6．pp.207-214

山崎宣次，掛川淳一，小川修史，加藤直樹，日比光治，興戸律子，森広浩一郎（2014b）テキストマイニングによる通知表所見の比較，日本教育工学会 研究報告集，JSET 14-1．pp.33-40

山崎宣次，掛川淳一，小川修史，加藤直樹，興戸律子，森広浩一郎（2015a）特徴単語を用いた記述支援に向けた小学校通知表所見の分析．日本教育情報学会学会誌，第30巻，第3号．pp.23-36

山崎宣次，掛川淳一，小川修史，加藤直樹，興戸律子，森広浩一郎（2015b）校務の情報化としての小学校通知表所記述支援．日本教育情報学会第31回年会論文集．pp.304-305

山崎宣次，掛川淳一，小川修史，加藤直樹，興戸律子，森広浩一郎（2015c）小学校通知表所見の特徴単語抽出のためのテキストマイニング手法の比較．日本教育情報学会学会誌，第31巻，第2号．pp.37-48